



動物レスキュー通信

2014年9月 第15号 (平成26年8月1日発行)

発行元
一般財団法人 国連世界動物救済支援機構 詩月財団

詩月(しづく) : 詩月財団 理事長
愛玩動物飼養管理士 一級
お問い合わせ : sizuku.foundation@gmail.com

ネコのハンティングは 絶対になくならない



ネコが初めて家畜化されたのは、今から約5,000年以上も前の事だと言われています。その最初の目的はネコのハンター能力を高く評価し、貯蔵した穀物を狙うネズミをハンティングしてもらう為でした。そのハンティングと言う仕事を任されていた事もあり、ネコはとても大事にされていました。現代のネコたちのもつばらの仕事と言えはハンティングではなく、コンパニオン(伴侶動物)として人々を癒すことがネコの仕事となっています。ですが、現代のネコ達にも、ハンティングをする能力はそのまま充分に残っています。

ネコのハンティング能力

ネコの体は小動物を効率的にハンティングできるように出来ています。耳は獲物の出す超音波の鳴き声まで聞こえるほどの鋭い聴覚を持ち、目は暗闇の中でも獲物の姿をとらえる事が出来るように自由自在に瞳が変化します。そして飼い主の皆さんが恐らく一度は触つて楽しんでる事があろう肉球は、音を出さずに獲物に忍び寄る事が出来るよう、とてもやわらかくなっています。その他にも、狙った獲物を逃がさないように瞬時に飛びかかれる瞬発力を生み出す全身の筋肉、捕まえた獲物を離さないようにするために自由に出し入れできる鋭い爪、捕まえた獲物にとどめを刺す鋭い牙など、これらを見るだけで、ネコが

かにハンティングにむいているかがお分かりになるはずです。生まれ持った身体で子猫の時代に兄妹たちと遊ぶ事によって、そして母ネコがハンティングしてきた獲物を練習台として、自然に優秀なハンターへと成長していくのです。飼いネコとなった現代のネコ達もハンターの本質が無くなってしまう訳ではなく、生まれながらのハンターなので、ネコちゃんの遊びと言えは、動くおもちゃやネコじゃらしに反応して飛びついたり、飼い主さんが歩く足にまでも飛びついてしまうネコちゃんもいます。

「たかがネコ一匹」ではない

昔、ネコちゃんのハンティング能力が本当に優れていると言う事を証明する出来事がありました。ニューシードランドにある無人島に飛べない鳥が生息していました。1892年、この島に灯台が建設される事になり、3人の灯台守とその家族、そして1匹の飼いネコが住むようになりました。彼らがこの島に降り立った2年後、この飼いネコが見慣れない鳥を捕まえてきました。不審に思った灯台守がその鳥を鳥類学者に送ったところ、新種だと確認され、スチーフイワサザイと名付けられたそうです。その後ネコは立て続けに15〜16羽ほどのスチーフイワサザイを捕まえてきましたが、ある日を境にネコははたたりとスチーフイワサザイを捕まえて

来なくなりました。その後、学者によって様々な調査が行われましたが、誰もスチーフイワサザイを発見する事はできませんでした。この隔離された外敵のいない島に生息し、進化した為、飛べない鳥だった為、たった1匹のネコによって、いとも簡単に捕まえられ、1894年に新種として発見されたと同時に絶滅してしまつたのです。このような事は昔に限つた事ではなく、現代でも起きている事です。小笠原諸島では海鳥がノラネコに襲われ、ある種では絶滅の危機におかれているものもあります。そのため、小笠原諸島ではノラネコを捕獲して本土に送り、里親さんに出すと言う試みが続けられています。しかしこのような事になつてしまつた背景には、外ネコの無計画な繁殖や、飼い主がネコを捨てることなどがあります。

このようにネコが野生動物達の生態系を崩し、絶滅の危機にさらすような事がある以上、「ノラネコ」を駆除すべきだと言う声が上がられるかも知れません。でもそんな事で終わらせていいのでしょうか？ 駆除する事が解決になるのでしょうか？ 私たちはそうとは考えておりません。ネコ達にとって、ハンティングは本能であり、なくてはならないもの。全く悪意はなく、むしろ無計画に繁殖させたり、捨てるという行為を繰り返した人間の責任なのです。この事をきちんと理解し、ネコを去勢、避妊なしで自由に外出させたり、捨てるたりしないようにしてはなりません。

以上のように、野生動物の生態系を守るため、近所でのトラブルを避けるため、飼いネコ自らの事故や病気を防ぐため、そして無駄に殺処分される命をなくす為にも、詩月財団ではネコの完全室内飼いを推奨しています。(詩月)